

# 食品添加物に関するリスク認知の形成に関する検討

臼井宗一

岐阜女子大学家政学部健康栄養学科

(2014年1月20日受理)

## **A study on the development of risk perception concerning food additives**

USUI Soichi

Department of Health and Nutrition, Faculty of Home Economics,  
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

(Received January 20, 2014)

In order to study the development process of risk perception concerning food additives, a survey was conducted with female college students (sophomores) for sources of information that made them feel insecure about food additives. The main source of the information when they were in infancy and at elementary school was found to be family (mostly mother); that was teachers when they were at middle school and high school, and that was media and Internet when they were at college. It is important to communicate the safety of food additives with mothers rearing children, teachers at middle school and high school, and mass media.

### 1 はじめに

食品の安全性に対する消費者の不安は大きい。2009年に中央調査社が実施した「食の安全」に関する調査<sup>1)</sup>によれば、食品の安全性について「非常に不安である」、「やや不安である」と回答した者が61.9%を占め、とりわけ食品添加物に不安を感じる者が多い。一方で、わが国の食品安全システムは世界でトップクラスにある<sup>2)</sup>と考えられており、極めて安全な食品が供給されている。とりわけ、消費者が不安を感じる食品添加物に起因する健康障害は皆無という状況にある<sup>3)</sup>。このように、食品添加物による健康リスクは極めて低いにもかかわらず、消費者は食品添加物の安全性に対し不安をいだいている現状にある。

リスクを人々がどのように認識するかをリスク認知と呼び、しばしばリスクとリスク認知が

乖離することが知られている<sup>4)</sup>。リスクとリスク認知の乖離をそのまま放置すると、消費者の不安対策のために過剰コストが必要になるなど、さまざまな社会的損出が生じる可能性がある<sup>5)</sup>。このため、消費者庁や食品安全委員会など関係行政機関によって活発にリスクコミュニケーションが実施され、リスクとリスク認知の乖離の解消が試みられている。

リスク認知はどのように形成されるのだろうか。食品添加物に関する事件や事故を原因として、現実に健康障害が発生していない現状の中では、リスク認知はさまざまな情報をもとに形成されると考えられる。これまで、食品の安全性に関するリスク認知の形成について検討した事例は、08年度に食品安全委員会が実施した「リスク認知の形成要因等に関する調査」がある<sup>6)</sup>。同調査では、子どもを持つ母親世代等を対象にフォーカスグループインタビューやインターネットを利用したアンケートを通じて、食品添加物や残留農薬などさまざまな食品安全の問題に関するリスク認知について調査を行っている。しかし、この調査はリスク認知の現状やその情報源について調査しているが、過去にさかのぼってどのようにリスク認知が形成されてくるのかについては検討していない。

食品添加物に関するリスク認知は幼少期から形成される可能性がある。そこで、女子大生を対象に過去に聴いた食品添加物の不安情報について調べ、食品添加物に関するリスク認知がどのような情報源によって形成されているのかについて検討した。

## 2 方法

調査は、2013年4月に女子学生163名(2年生)を対象に行った。

食品衛生学の授業で、「私たちはなぜ食品の安全に不安を持つのか」をテーマに取り上げ、その中で、これまで食品添加物についてどのような不安情報を聞いたかを学生たちに思い出してもらった。

思い出してもらった内容は、食品添加物に関する不安情報について、①いつごろ、②誰から(あるいはどんな情報媒体から)、③どのような内容の話を聞いたかとし、付箋紙(73×123cm)に匿名で自由に記載してもらった(複数回答あり)。授業では、それをうい情報源についてまとめて班ごとに発表した。付箋紙は授業終了後回収し集計した。なお、食品添加物以外に関わる内容等が記載されている付箋紙については集計から除外した。また、学生たちには全体集計し、公表することについてあらかじめ了承を得た。

## 3 結果

221枚の付箋紙が回収できた。このうち8枚は食品添加物に関する内容ではなかったので集計から除外し、213枚について分析した。付箋紙への記載状況は、一人当たり1.3枚であった。

### 1) 不安情報の入手源

食品添加物に関する不安情報の入手源を表1に示す。不安情報の入手源として「メディア」をあげた者が最も多く64枚(30.0%)を占めた。次いで「先生」63枚(29.6%)、「家族」55枚

(25.8%)であった。他に「友達」19枚(8.9%),「インターネット」4枚(3.8%)などであった。

「メディア」の内訳をみると、テレビが最も多く39枚(メディアの中の60.9%)を占め、次いで本19枚(同29.7%)であった。「先生」については、「家庭科教員」と特定したものが13枚あった。「その他」の中には単に「先生」と記載したもの及び「給食の先生」(1枚)の名前をあげたものもあった。

家族の内訳をみると、「母親」が最も多く27枚(家族の中の49.1%)を占めた。単に「親」(「両親」を含む)と記載したものが12枚(同21.8%),祖母が10枚(同18.2%)あった。「父親」は3枚(同5.5%)と少なかった。

表1 食品添加物に関する不安情報の入手源

情報源	付箋紙数(枚)	情報源内訳	付箋紙数(枚・内数)
メディア	64 (30.0%)	テレビ	39 (60.9%)
		本	19 (29.7)
		その他	6 ( 9.4)
先生	63 (29.6)	家庭科教員	13 (20.6)
		その他	50 (79.4)
家族	55 (25.8)	母親	27 (49.1)
		祖母	10 (18.2)
		父親	3 ( 5.5)
		親	12 (21.8)
		その他	3 ( 5.5)
友達	19 (8.9)		
インターネット	8 (3.8)		
その他	4 (1.9)		

## 2) 食品添加物に関する不安情報の入手時期と情報源の関係

213枚の付箋紙のうち、「いつ聞いた」かの記載がなかった10枚を除外し203枚について入手時期と情報源の関係を分析した。

食品添加物に関する不安情報の入手時期を図1に示す。入手時期は高校生のときがもっと多く57枚(28.1%),次いで大学生48枚(23.6%),小学生47枚(23.23%),中学生42枚(20.37%)であったが、それぞれの時期に大きな差はなかった。小学生以前(以後「幼児期」という)にも食品添加物に関する不安情報を入手しているケースが9枚(4.4%)存在した。

食品添加物に関する不安情報の入手時期と情報源の関係を表2及び図2に示す。幼児期の段階では情報源はすべて「家族」であった。また、小学生では家族が30枚(63.8%)を占めた。以後、家族が情報源となるケースは減少し、大学生では1枚(2.1%)であった。「先生」は、小学生では10枚(21.3%)で、以後増加し高校生で25枚(43.9%)であったが、大学生では11枚(22.9%)に減少した。メディアは、小学生では3枚(6.4%)であったが、中学、高校と増加し、大学生で最も多くなり21枚(43.8%)あった。

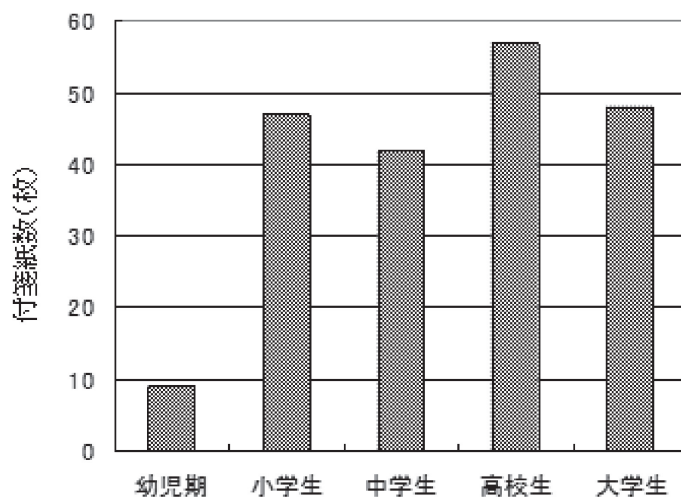


図1 食品添加物の不安情報の入手時期

表2 食品添加物に関する不安情報の入手時期と情報源の関係

情報源	小学生以前	小学生	中学生	高校生	大学生	計
家族	9	30	9	3	1	52
先生	0	10	17	25	11	63
メディア	0	3	14	20	21	58
その他	友達	0	4	0	7	18
	インターネット	0	0	0	2	8
	その他	0	0	2	0	4
計	9	47	42	57	48	203

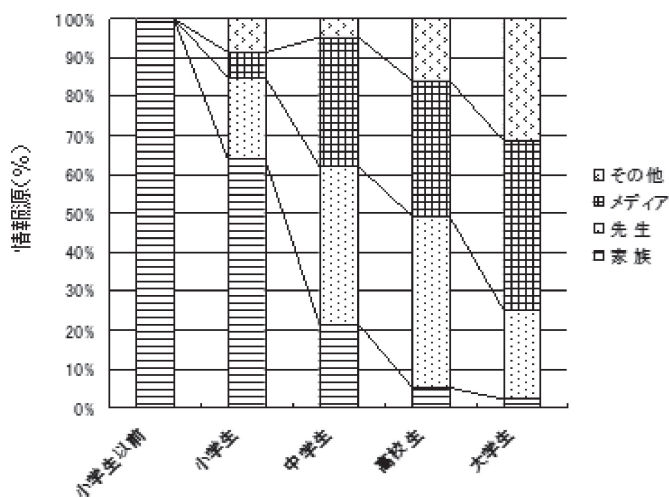


図2 食品添加物に関する入手時期別情報源の百分率

### 3) 情報の内容

不安情報の内容は、「食品添加物は身体によくない。食べてはいけない。」という内容が最も多かった。なかには、「何を言われたのか覚えていないが、食品添加物は体に悪いというイメージが残った。」や「体によくないとひたすら言われ続けてきた。」というものもあった。ただし、中学、高校、大学生になるにしたがって、「添加物は体に蓄積されていて、将来悪影響が出る」など、体によくない理由が述べられるケースが増加する傾向にあった。

## 4 考察

女子大生（2年生）を対象に食品添加物の不安情報の入手源や入手時期等について調べた。食品添加物に対する不安情報の主要な入手源は、メディア、先生、家族でこれら3つの情報源で85.4%を占めた。これらの情報源は誰にとっても権威ある存在である。批判力が十分でない時期に、こうした権威ある存在からもたらされる情報をそのまま受け入れ、「食品添加物は危険なものである」という基本的なリスク認知が形成されるものと考えられる。どのような内容を聞いたかの項目では、「食品添加物は危険」であるということ及び「食べてはいけない」という答えがほとんどで、高校生や大学生段階になるとなぜ危険なのかの理由が付加されるケースがあった。高校生や大学生では主要な情報源が先生やメディアになるため、単なる「食品添加物は危ない」という断定や「食べてはいけない」という禁止だけではなく、なぜ危険なのかの情報が併せて提供されているものと考えられる。なかには、「何を言われたのか覚えていないが、食品添加物は体に悪いというイメージが残った。」という回答があった。多くの学生にとって、言われたことは正確に記憶していなくても、「危険というイメージ」と「食べてはいけない」という思いだけが残ったということだと考えられる。

食品添加物に関する不安情報の入手時期とその情報源の関係をみると、幼児から大学生への各発達段階に応じて主要な情報源が変化していくことがわかった。

幼児期から小学生のころの主要な情報源は家族であった。母親や祖母など女性が情報源として重要な位置を占めていた。リスクへの反応には性差が存在するといわれており、女性が男性に比べリスクに敏感であることが知られている。また、年齢とも関係しておりリスク認知が高まるのは30～40代の女性であることが多いといわれている<sup>4)</sup>。このことが、家族の中で母親が主要な情報源となっている理由と推測される。

中学生から高校生にかけては学校の先生が主要な情報源であった。特に、家庭科の先生が情報源として大きな位置を占めている可能性がある。親からの情報によって基本的なリスク認知が形成され、さらに学校の先生から同様の内容の情報がもたらされることによってリスク認知が強化されている姿が浮かび上がる。

大学生ではメディアが最も主要な情報源で、家族や先生の情報源としての役割は相対的に低下する傾向があった。食品安全委員会が08年度に行った20代以上の男女2,000人を対象としたインターネットによるアンケート調査結果では、食品添加物に不安を感じるきっかけとなった情報源はニュース・報道番組、新聞などメディアが上位を占めている<sup>6)</sup>。年齢が上がるごとにメディアが主要な情報源となっていくものと考えられる。

これらの結果を総合すると、幼児期、小学生、中学生、高校生、大学生へと成長するにつれ主要な情報源が家族、先生、メディアへと変化し、さらには、これらの情報源から繰り返し同種の情報が提供されるため、幼児期あるいは小学生のときに形成された「食品添加物は危険」という基本的なリスク認知が、中学生、高校生、大学生へと成長するにつれ、徐々に強化されていくものと考えられる。

食品添加物に対するリスク認知の改善を図るためには、親（特に母親）や先生（特に高校）、メディア情報の制作に関与する者を対象にリスクコミュニケーションを行うことが重要である。

## 参考文献

- 1) 中央調査社：「食の安全」に関する調査（オンライン）2008.  
<http://www.crs.or.jp/data/pdf/foodpr08.pdf>
- 2) 関澤 純：食品におけるリスクを考える，環境技術，Vol. 38, No. 8, 17-23
- 3) 厚生労働省：2013年食中毒統計（オンライン）  
<http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/04.html#j4-2>
- 4) 木下富雄：リスク認知の構造，日本機械学会誌，Vol. 106, No. 1020, 2003.11, 11-14
- 5) 臼井宗一：リスクとリスク認知の乖離，食物栄養と食文化（岐阜女子大学食物栄養学会誌），2012
- 6) 食品安全委員会：リスク認知の形成要因等に関する調査（オンライン）  
<http://www.fsc.go.jp/fsciis/survey/show/cho20090020001>